

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

## 遠距離家族の共通拠点

グループ会社から頼まれたリフォームセミナーに行くため、仙台行の新幹線に飛び乗った。

仙台といえど、ここ数年で爆発的に人気の「せり鍋」がある。新鮮でなければ味わえないしゃきしゃきのせりを根っこごと、薄く切った力毛肉と豆腐でいただくのが美味しいとか。根菜を食べることが身体にいいと聞くし、春の七草のひとつであることもあり、この時期の仙台出張は何だかうれしい。

セミナーは無事に終わりその後、山形からわざわざ来て参加された方のご相談を受けた。その方は山形に住みながら、京都にある住宅をリフォームしたいと言った。仕事で東北にいるものの、元々は京都出身の方だ。数年後に迎えるリタイアに向けての準備も考え始めている。仙台にいる子供さんといえば、四国にいる子供さんもいて、三か所からみんなが集まる家としてはこの京都の家がちょうどいいとおっしゃる。

ただ築年数が経ち、水廻りを何とかしてほしいと子供達からの要請がありリフ

ォームを考えていた。普段は空き家というもったいなさはあるものの、育った家でもあり人に貸すとか、売るとかいう気持ちにはなれずにいた。それより何より成長と共に離れてしまった家族の集合場所として、この家の役割は大きいようだ。

家族のつながりとして近居・隣居・同居のお話をすることが多いが、遠居の時の関わり方はなかなか難しい。日頃の生活に、遠くに住んでいた家族がたまに訪れると、最初はいいのだが「来てよし、帰ってよし」とため息まじりになりがちだ。帰省する側の若い人の話を聞いていても「行きたい、すぐ戻りたい」になるという。

その点、集合場所としての住居は誰が役割を担っているわけでもなく、さりとて誰かがやらないと回っていかない環境下での連携と協力は、心が一つになっかなか居心地がいいだろう。一家族が二地域居住するのではなく、数家族が共通の拠点を一緒に持つという考え方も良さそうだ。

日々の生活に割り込むの

ではなく、別にどこかに大家族のための住居があるのはいいかもしれないと感じさせてくれた。

先日、地方への移住に関する雑誌の取材を受けたが、その雑誌に載っている全国の中古住宅物件の価格に驚いた。東京に長く住み、建物よりもずっと高い土地代が当たり前になってしまっていた私には考えられない価格設定だ。さらに驚いたのは、記者の方が「安い物件価格よりも、かなり高い何百万円もかけてリフォームするのは珍しいことではない」と言ったことだ。生きがいや興味性を活かした家作りも考えてのことだろうか。空き家問題や地方人口減少問題を前向きに考える一つとして、地方の住宅利用の多様性を広める必要がありそうだ。

行きの車窓から見えてきた磐梯山や那須の山々には雪が掛かり始め、冬の旅情もいもものだと思っていたのだが、仙台に近づくにつれ山の雪がなくなり、仙台は海に近い比較的雪の少ない、住みやすい都市であることを改めて感じた。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。